

戦争と福生の人びと

■日清戦争に出征した人

一八九四年（明治二十七）に勃発した日清戦争は、わが国がはじめて体験した対外戦争であるが、この戦争に福生村から出征した人がいる。町田政吉がその人で、町田は日清戦争の従軍記録を綴つた

「征清手帖」を残している。日清戦争が起きた年町田は充員補充のため召集され、翌年三月台湾に出征した。そのころ日清戦争は日本が遼東半島の制圧を終え、山東半島の威海衛を攻撃し、清国との講和の打診が始まっていた時期である。したがって、台湾出兵は戦争終結のための講和の状況をにらみながらの出兵で、清国に台湾の割譲を迫る既成事実をつくり上げるための作戦であつた。

町田の兵役での任務は看護手であった。具体的には、兵士の体格検査や健康診断、戦場でのけが人や病人の手当てなどであつた。戦争では、敵との戦いのほかに病気との戦いもあつた。それだけに町田の役割には重要なものがあつた。とくに台湾方面では、投入された兵力は五万人であつたが、戦没者四四九八人、そのうち病死者は三九七一人であつた。病魔との戦いの壮烈さが想像される。

町田の部隊が派遣されたのは、台湾海峡の澎湖島であったが、戦況が



落ち着くと、彼は島内を歩き、筆談で島民の病気をみたり、農業について話し合つたりした。一八九五年（明治二十八）八月九日、日清戦争から帰郷すると、村では村主催の凱旋式を東多摩小学校で開催した。

■日露戦争に動員された人びと



福生村表忠碑建立記念(福生神明社境内 大正8年2月) 日清・日露戦争に福生村から従軍した者の名前すべてが刻まれている。

日露戦争は一九〇四年（明治三十七）二月、日本海軍とロシア艦隊の中国・旅順港での戦いから始まり、アメリカ大統領ルーズベルトの勧告により日露両国はボーツマス条約に調印して、翌年九月に終結した。日露戦争でわが国が費やした戦費は、約一七億円で、日清戦争の八倍強、明治三十六年度の国家予算の七倍、戦死者、戦病者が約十万人であったといわれる。この日露戦争への出征者は、福生村で五五人、うち四人が戦死または戦病死している。熊川村では二三人出征し、五人が戦死または戦病死している。日清戦争での出征者数が、福生村で一人、熊川村で一人であつたことから考へると、日露戦争の動員は非常に大きかった。

日清戦争に際しては、西多摩地区では兵役に服した兵士の功勞に報いるために、西多摩郡徴兵報労義会が活動していたが、日露戦争に際しても、福生地域では徴兵報労義会のようなものが活躍していたようである。青年会にとつても、出征兵士の送迎と留守宅の扶助活動は、重要な活動であった。

■太平洋戦争と福生の子どもたち

一九三五年（昭和十）十月十九日の『読売新聞』の三多摩版に「その名も“国防色” 学童が制服着用 熊川村校がトップを切る」という記事が



子供たちの兵隊ごっこ(熊川の河原で撮影 昭和15年) 上級生が大将格で5、6年生は一般兵隊格。持ち物といえば木の枝で作った刀である。



農繁期の託児所(福生青年団俱楽部 昭和10年代)

のつた。国防色というのは、日本陸軍の軍服の色であるカーキ色のことである。国防色の衣服は、このあとすぐに各地に波及した。

熊川村校では、三七〇名の全校児童と職員の服装が統一されたが、この制服は、一着一円五〇銭で、四季兼用であった。児童全員がまったく同じ色の制服を着て登校するので、朝礼などは壯觀ともいえた。

一九三七年(昭和十二)には、熊川村校で乃木少年団が結成され、冬のあいだの五か月間、毎夜、村内各戸に火の用心を訴えて巡回する社会活動が始められた。一方女子児童は、校長が音頭をとつて、満十歳以上高等科までの児童一二〇名を愛国少女団として組織した。

熊川村校では、一九三九年(昭和十四)六月一日から十五日までの一五日間、尋常五年以上は農繁休業となり、四年生以下は農繁期授業短縮となつた。労働力不足のおり児童もまた、貴重な労働力として大きな役割が課せられたのである。この時期、古くからあつた農繁休暇は、教育の場でも次々と戦時体制づくりのための施策に目的を変えて実施された。夏休みにも集団勤労奉仕などの計

出征家族・勤労奉仕ノ実況水彩画
昭和十六年十一月農業実行会写真



出征兵士の留守宅への勤労奉仕(稲刈り 現在の南田園地区の水田 昭和16年11月) 農繁期に勤労奉仕を組織しての奉仕作業がさかんに行われた。

画が立てられ、高等科と尋常科五、六年生が陸軍立川支廠熊川倉庫に勤労奉仕を行つた。一九四一年（昭和十六）になると、大政翼賛会国民生活指導部からの要請で、学生生徒児童農業動員という計画が立てられ、四年生以上は教室での授業を中止し、相当の期間農業労働に専念させることが求められた。重大かつ緊急の課題として、戦時下国民食糧確保が論じられ、少しでも多くの増産と節米運動をしようという一大計画の一環であつた。仕事は六月の麦刈りから始まって、田植え、桑摘み、草刈り、除草、春蚕の手伝い、十月中旬から十一月中旬にかけての甘薯掘り、稻刈り、耕耘、堆肥造成、収穫物や肥料の運搬など、高度な技術を必要としない作業に従事させるというものであつた。

子どもにこうした仕事をさせるには、まず「教師ハ率先、分ニ応ジテ躬行実践」することが求められ、「教師ノ挺身実践」こそが運動が成功する鍵とし、率先垂範が「根本要件」とされた。児童のこうした農業労働には、それぞれの地域で「農業報国挺身隊」などの名称をつけさせられたといふ。福生第一国民学校の昭和十七年の農繁休業と短縮授業は、初等科五、六年と高等科一、二年は勤労奉仕班を組織し、出征軍人の家庭に勤労奉仕に出向き、余裕の労力は「一般生産増進のため奉仕」することが課せられた。初等科一～四年生は、自分の家が農家ならば農業を手伝わせ、農家でない子どもは勤労奉仕に参加するよう求められた。

空襲



福生第一国民学校の浜中雄一校長は、一九四四年（昭和十九）十一月一日から翌年八月十五日まで「防空日誌」を記している。それによれば、昭和十九年の二か月間では警戒警報が五〇回、空襲警報が一二回で、それぞれ月平均二五回と一回である。昭和二十年になると、八月十五日までの八か月半で警戒警報三三二回、空襲警報は七三回で、月平均それぞれ四一回、九回になる。空襲警報の出た回数は月平均にすると減つ

てゐるが、警戒警報は約四倍に急増している。多い日は一日に六回も警戒警報が発令され、解除まで數十時間に及ぶこともあつた。警戒警報が出ると、校長は奉安殿ほうあんでんに走つていき、御真影ごしんえいを取り出して安全な場所に移し、解除まで守りつづける責任があつた。このような責務は校長だけでなく、教員もまた警報が出るたびに非常召集となり、学校へ駆けつけることになつてゐた。

一九四五年（昭和二十）になると、全国各地で空襲がひんぱんになつてきた。福生周辺でも、一月二十七日に元八王子村から恩方村（八王子市）、二月十七日には由木村や砂川村（立川市）、三月五日も砂川村と、空襲はしだいに近くなつてきたが、四月四日の未明に中島飛行機（三鷹市）、立川市、川口村（八王子市）、加住村（八王子市）と、三多摩各地の広い範囲にわたつて激しい空襲に見舞われ、このとき福生地域でもはじめて死者を出した。

空襲はしだいに激しくなり、軍事施設や民間施設を問わず、さらには都市部、農村部の区別なく空



福生町役場屋上にあった防空監視哨の所員(福生町役場 昭和10年代)



昭和20年4月4日、熊川地区に落とされた50kg爆弾の破片 立川空襲に飛來したP51ムスタング機が投下、熊川77番地の民家玄関の柱に突き刺さった破片。

襲をうけるようになった。八月一日夜中の一二時半ごろ八王子が空襲され、西の空がまつかになった。その晩福生駅の北方にも焼夷弾が落ちたが、煙のなかだつたため被害はなかつた。しかし四、五分後に熊川駅北側一帯に焼夷弾がばらまかれ、激しい炸裂音と同時に火柱が立ちのぼり、火

の粉が渦巻き農家の数軒が焼失した。

このとき八王子では空襲予告のビラがまかれており、消防車五〇台が集められていたが、一六九機のB29による照明弾三個、集束焼夷弾を中心とした約一六〇〇トン(約八〇〇〇個分)が投下され



水筒(民間使用 昭和10年代)



飯ごう(民間使用 昭和10年代)



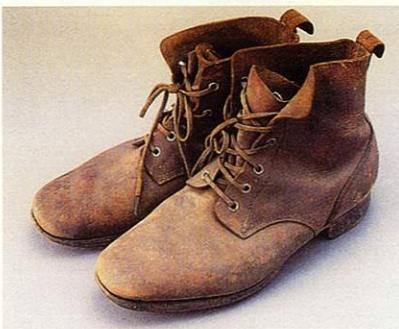
ゲートル(民間使用 昭和10年代)



鉄かぶと(民間使用 昭和10年代)



陸軍航空整備学校記念盃 昭和15年、多摩飛行場に陸軍航空整備学校が開設されたことを記念して関係者に配られた。



軍靴 日本陸軍で使用したもの。